



戸田が手がけたサントリーの広告。キャラクターとして起用した「パピペンギンズ」が人気を博した。アーティストティックなクリエイティブで広告界の常識を壊した



「宝石を超えた光るアート〈Brilliant〉」。戸田の近年のテーマは「光る」。光るキャンバス「Lightface」(2016年)の意匠監修も行った



戸田は2018年、福井県坂井市三国町に「Brilliant Heart Museum」をオープン。そこから見える雄島をアートに昇華させた。今回の展覧会ではダイジェスト映像を展示

きな喝采を浴びたという。そのモデルとは、当時まだ無名だったナオミ・キャンベルだった。戸田は言う。「こんなことがよくありました。でもそのこだわりが嬉しかった。絶対成功させていいものを作りたいという熱が現場に渦巻いていたのを覚えています」

ユーターやカメラなどさまざまな機器が発達したことで、どんな人でも、プロとして突き詰めたい人でなくても、「ある程度のこと」はできるようになったと感じる。その結果、微妙な差にこだわるのが少なくなったのではないかと、という。もちろん、バブル期などとは違い、日本企業が広告やアートにそこまでコストをかけられなくなったという背景もあるだろう。

だからこそ戸田は、今回の展覧会で、プロが切磋琢磨しあっていた当時の熱を若い人にも感じてほしいと思っている。**AERA創刊時の熱**

その戸田は、言わずと知れたAERAの生みの親の一人だ。1988年の創刊当時から26年間、表紙のアートディレクションを手がけた。いまま表紙に使われている「AERA」のロゴは、戸田の作品だ。「AERAを立ち上げる時にも、朝日新聞がつくるのだから名前には『朝日』を入れなければならぬ、いや新しいものをつくるのだから名前に朝日は入れないほうがいいんじゃないかと侃々諤々の議論がありました。そして『AERA』でいく、と決まった。ここにも、いいものを作りたいという熱が詰まっていた」

戸田は、フォトグラファー・坂田栄一郎とタッグを組み、数々の世界じゅうの要人やスターを表紙にしてきた。思い出話を聞くと、英国の元首相のマーガレット・サッチャーを表紙にしたときのことを語った。「AERAは広告やアートとはまた違って、リアルを追求しなければならぬ。シワもそれはその人の生きざまだから当然、残します。それと表紙としての品を追求して、いい形で表現しなければならぬ。出でくだった人がどんな反応をするのかはいつも不安がありました」

今回の展覧会には、南アフリカの元大統領ネルソン・マンデラと、映画監督の黒澤明が登場している。そのほか、戸田がアートディレクションを手がけたAERAの表紙登場者のリストも掲示されている。

戸田は最後に力を込める。「アートもスポーツと同じ。切磋琢磨して競争をするからこそ、いい仲間が信頼も生まれる。そういう熱気が再び生まれてほしい」

編集部 木村恵子 (文中敬称略)



「創造する広告⇨アート⇨新しい光」戸田正寿の世界」は、福井県立美術館で8月31日まで開催。開館は午前9時～午後5時。会期中無休

広告口とアート そこにある「競争」

戸田正寿が現代に伝えたいもの

AERAの生みの親の一人、日本を代表するアートディレクターの戸田正寿。時代が移り変わるなかで、広告やアートを通して訴えたいものは何か。

意外な言葉が口をついた。「見てほしいのは『競争』の跡なんです」

言葉の主は、日本を代表するアートディレクター、戸田正寿(74)。現在、出身地である福井県の県立美術館で、戸田が手掛けてきた作品を一堂に披露する展覧会「創造する広告⇨アート⇨新しい光」戸田正寿の世界」が開催されている。

世界をあつと言わせる

その見どころは「競争」なのだという。一見、アートと競争は水と油のようにも感じるが、戸田によれば違う。

「1980年代、広告のアートディレクションが華やかだったころ、デザイナー同士のいい意味での競争心があった。いいものを作ろう、他にはないものを

世界に発表してあつと言わせた。い、そんな思いがこだわりを生み、数々のいい作品を生み出したんです」

こんなことがあった。

伊勢丹からの依頼を受け、広告を手掛けていた戸田。世界的なフォトグラファーであるステイヴン・マイゼルトと、ポスターなどの撮影に臨んでいた。起用するモデルも決まり、撮影が行われる準備が進んでいたが、直前になって、ステイヴン・マイゼルトから「どうしてもこのモデルを使いたい」と、違うモデルでの撮影の打診があった。

ギリギリのスケジュールだったが、そのこだわりをクリエティブチームは一丸となって応え、さまざまな方面への調整をし、モデルを代えての撮影が行われた。そしてできあがったクリエイティブは、世界中から大



とだ・せいじゅ / 1948年、福井県生まれ。88年のAERA創刊に関わり、26年間、表紙のアートディレクターを務めた。東京ADC会員賞、最高賞ほか、世界各地でピエンナーレなどで数多くの賞を受賞

photo 梅津忠夫(47ページ目)